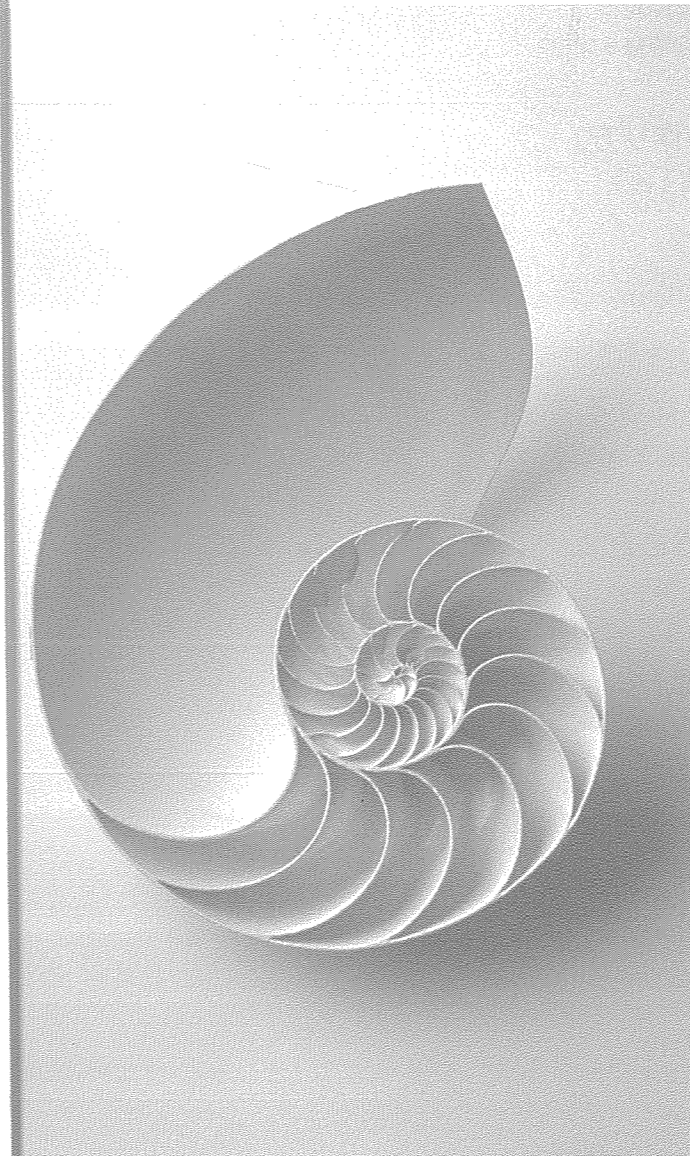


第10回
文窓賞優秀作品集



F
U

I
M

発行
2016年10月29日
神戸大学文学部同窓会
文窓会
<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/> (文窓会)
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/> (神戸大学文学部)

2016年10月発行
文窓会
神戸大学文学部同窓会

第10回 文窓賞 学生レポートコンクール 入賞作品

優秀賞

「『誰もいない』 どこか」
植木 ゆりいか（英米文学専修5回生）

「おいしいケーキの作り方」
衣笠 美希（仏文専修4回生）

佳作

「『思いあがった諧謔心』による学び」
田中 昇一（日本史学専修3回生）

「大人になるということ」
中澤 篤史（学部1回生）

「茶碗の中の池」
山根 彩花（学部1回生）

「『純粋な関係』をめぐる通念と私見」
三宅 萌（学部1回生）

◎ 選考会 2016年9月9日

◎ 選考委員

吉田 浩次（審査委員長）

増本 浩子 学部長（ヨーロッパ文学教授）

市澤 哲 副学部長（日本史学教授）

白鳥 義彦 副学部長（社会学教授）

武藤 美也子 日高 健一 花木 直彦

廣野 幸夫 西川 京子 田中 賢司

三宅 征彦 河島 真

優秀賞

「誰もいない」 どこか

植木 ゆりいか（英米文学専修5回生）

人はどうしてここじゃないどこかへ行きたく
なるのだろうか。

いつからだろうか、私があんなに人の目を気
にするようになったのは。近年、アドラーの心
理学が話題になり、「人間の悩みは全て対人関
係の悩みである」という言葉が話題になったの
は記憶に新しい。そんな当たり前のことを発言
している「偉い」人がいるなんて驚きだった。
なぜなら、私にとってその言葉はまさしく私が
ずっと考えてきたことだったからだ。

小さな頃、私は無敵だった。あの頃の私から
みた世界においては、だが。福井県の山に囲ま
れた田舎で両親に愛情たっぷりに育てられた。
勉強もそこそこ頑張ったら一番になれたし、ス
ポーツだってやれば出来るって信じていたし、
実際テニスでは県大会で優勝することだって出
来た。正義感に溢れていた私は、先生が間違っ
ていると思えば迷わず手を上げて正さずにはい
られない優等生だったのだ。もちろん、ご察し
の通り、私の「黄金期」は長くは続かない。わ
たしは「正しいこと」をしていたはずなのに、
気づいたら友人ってなんだかわからなくなって
しまって、誰も「友達」なんて呼べない関係に
なってしまっていた。

小学校の途中からわたしは、人の目に酷く怯
えながら道化として振る舞い、でもプライドの
高い少女になっていた。信頼できる友人が欲し
くて、欲しくて堪らないにもかかわらず、わた
しらしさのかけらもない、コンプレックスの塊
には本当の意味の「友人」なんてできるはずも
無かった。私は「きつといつか中身も外見も素

晴らしい人間になるんだ」って信じたいと思
いながら、あらゆる自分自身の欠点を見て同時
に苦しんでいた。嫌われないだろうかと怯えな
がら私が口にしたのは「会う人によってたくさ
んの自分がいてどれが本当の自分か分からなく
て苦しい。私は偽善者だ。」という言葉だった。

高校生になり、気の合う仲間も増え、心か
ら「友人」と思える人が出来た。大学に入って
からもより多くの友人が出来、私はやっと自分
が人間関係の悩みから解放された状態になれた
と思った。私は高校、大学と知っている人がな
るべく少ないところに行きたい欲求に駆られて
いた。だから福井県で一番いい高校を目指し中
学の同級生になるべく進学できないところを選
んだし、大学を選んだのだからそんな不純な動
機から選んだことを否定できない。誰にも私を
判断して欲しくないからだった。実は目立つこ
とも、人を仕切ることも大好きなのに、人の目
が怖かったのだ。大学に入っても、様々なコン
プレックスを抱えたままだった。私はこんなイ
メージをすることがよくあった。人間というも
のは、内側からの矢印と外側からの矢印の均衡
によって人間の形を保っているというものだ。
だから時たま、外側からの矢印が大きすぎて自
分が潰れてしまう感覚に襲われた。それならば、
家にこもっていれば良いのかもしれないが、た
くさんの人と話すことも好きなのでよく分か
らない状態であった。大学に入ってから数年が経
ち、友人も出来たし、バイトもサークルも全部
そこそこ楽しかった。でも私の「誰もいない」
どこかへ行きたい欲は止まらず、必死で勉強を

してロンドンに交換留学を決めたのは3年の冬だった。

福井県の田舎町に生まれ、福井県の中心部で高校時代を過ごし、大学は神戸へと進んできた私が次に選んだ「どこか」はロンドンであった。SOAS, University of London に学びたいことがあった。私は英米文学を専修し、シェイクスピア劇を学んでおり、この大学には世界でシェイクスピア劇がどのように翻案され、演じられたり、映画化されたりしているのかを学ぶことが出来た。日本研究の優れた大学であり、授業はどれも刺激的で何より学生、教員の全てに対する批判的な眼差しに驚いた。忘れもしないが、一度目の授業で大概の教員が言うのは「私が間違っていると思うならば指摘しなさい、大歓迎だ」という言葉だった。そして言うだけではない。実際に学生たちは学年にかかわらず、先生に対して敬語も使わないで名前を呼び、自分の意見を伝え手厳しく批判するのだった。年齢や性別、肌の色、英語のうまさなんてなんの関係もなかった。そこにあるのはただ伝えたい「思い」と学びたい意欲だった。日本社会でよく言われてきたような空気を察することや、我慢し、控えめであることには「良いこと」なんかじゃなくて、ただの意見を持たない「馬鹿」になった。

「異文化理解」とどこかの誰かは言うかもしれない。でも私は「異」文化とってしまうことが嫌だ。「異」文化とってしまった時点で、それは自分事ではなくなってしまう気がするからだ。私は全部取り入れたい、だから「異」文化を理解したのではなく、自分の思考の枠組みを破壊された経験をしたと言いたい。他でもない「自分」を繰り返しみつめる時間であったのだった。でもこの体験は、上記したように、外からの矢に自分が貫かれ、苦しむイメージではもちろんなかった。自分を構成するなんらかのプログラムが新しく組み替えられる体験だったのだ。私は時に恐ろしく感動してちょっぴり震

えてしまったりした。

二人の友人とのエピソードを記したい。たぶん彼らはもう覚えていないちっぽけなことだけれど、わたしにとっては人生を変えたって言ってもいい体験だったのだ。私は、自分の大きすぎる笑い声と、時々出てしまう自分の「邪悪」な部分が嫌いだった。彼女はある時、笑いながら言った。「ゆりいかの笑い声って初めて会った時から本当に大きくてびっくりしちゃった。日本人の女の子はみんな笑い声も話し声も小さいって思っていたから。でもね、だからこの子は絶対面白いって思ったの。」と。人と違い、目立ってしまう大きな笑い声は私のコンプレックスだった。でもその「違い」こそが「わたし」を「わたし」にして、仲良くなるきっかけになった。わたしはちょっぴりだけど、わたしの大きすぎる笑い声を愛せるようになった。そして次にわたしの「邪悪」な部分であるが、彼女は大いに面白がってくれた。彼女はいつも「本当、ゆりいかって超邪悪だよ」と言って笑うのであった。そこにはなんの「裏」もなかった。そこには面白がってくれる彼女だけがいた。ちょっと泣きそうになるくらい嬉しかった。彼女には結局うまく伝えられていないけれど。

もう一人の友人は偏屈だった、と言ってもいいかもしれない。彼は何にでも批判的だった。彼は「彼らしさ」の塊だった。『リア王』のセリフではないが、どこを切り取っても間違いなく彼だった。彼は自分の意見を持ち、改め続け、発信し続けることの大切さを教えてくれた。彼は日本のアニメに性的な描写やそれを連想させるカメラワークが多いことに批判的だった。わたしは考えすぎたと思ったし、そんな主張を持っていたところで何も変わらないし意味ないのではないかと言った。「そういうけど、指摘されたら君も同じく、問題だと思ったならば、その意見を持ち続けなさいといけない。誰でもいう意見ではない、その意見を持ち続け、誰かに

伝えることは決して無意味ではない。むしろその思いが消えてしまったら、その「問題」が「問題」として認識されず、「問題」が「問題」ではなくなってしまうの方が問題だと思う。」と静かに彼は言った。私は、なんて美しいロジックなんだろうと感動してしまった。いつかの誰かの「当たり前」は実は全然「当たり前」ではなくて、彼みたいに問題意識を持ち続けることが社会にとって大切だと思ったし、ちっぽけな私だって「わたし」の意見を持ったら、誰かに、いやもっと大きな社会にだって「良い」影響を与えることは可能で、そのためにはメインストリームではなくても「思い」を持って自分なりの理由付けだけが必要だということがわかった。強調したいことは、意見を押し付けてはいけないということである。だから心を開いて自分のロジックに欠点があるならば変更できるような自分であるべきだし、点検を怠ってはいけない。私一人の意見だって立派な意見で、権威なんてなくても、若くてもそんな関係ない。ちゃんと「わたし」の意見を持とうと思ったし、わたしもどこを切り取っても「わたしらしく」ありたいと思った。

もちろん、留学しなければならぬわけではない。ここじゃないどこかへ少しでも行ってみることは、間違いなく有益な体験であると思う。旅行だって良いと思う、なぜなら本当に自分にとって必要なものが分かるからである。一週間暮らせたならば、実は私たちはそれだけあれば本当は他に何もいらなかったりする。でもたくさんものや人に囲まれているせいで本当に必要なものが見えてこない。そんな気がするのだ。わたしは「誰もいないどこか」に行きたいという衝動がいつもあった。実は、大切な誰か、分かち合いたい誰かがいて、その人ともっと繋がりがかったのに、醜い自分を見られてしまうのが怖くて、逃げ出していたのかもしれない。そんな時に彼らに会い、「わたし」自身をみて、

踏み込んで来てくれたことに心から感謝している。

いろいろと逃げ続けてきたのかもしれないわたしが、どうにもこうにも、どうしても離れられないものがあった。それは他でもない自分自身であった。自分を探したりするのってちょっと馬鹿みたいだって思う。だってどこに行ったら、この世界の中心は自分でしかない。世界にはいろんなところがあるし、いろんな人がいる。「[社会]なんてこんなもんだよ。」って下を向いて、なんとなく生きても同じ人生なのだ。私たちは死んだらすぐ今ここで終わることが出来るのだ。でも力強く、この「わたし」で生き続けることを選んでいるのではないだろうか。

わたしなりの冒険を続けて分かったことは、思い出される多くのことは「人」だってことだ。あるものや場所を見たときに、「ああ、あの人が好きだったな」なんて思い出されるのはそこで何か、たぶん時間とかそういうものを分かち合った「誰か」だった。

帰国する前日、友人がわたしに尋ねた。「君が、ロンドンで一番恋しくなるものはなんだと思う。」と。即答だった。「ここで出会った人たちかな。」

優秀賞

おいしいケーキの作り方

衣笠 美希（仏文専修4回生）

嫌なことがあった日にはケーキを焼くに限る。もやもやした気分も、泣きたくなるような気分も、小麦粉と一緒にふるいにかけて混ぜ込んでしまう。

頭の中を整理したいときにはメレンゲを泡立てる。何も考えずにただ腕を動かして、どろどろの卵白が徐々に真白い雪のようになっていくのをぼんやりと見つめる。そのうちに頭の中まで真白になって空になっていく。

環境に嫌気がさしたらゼリーをつくる。透き通ったゼリー越しに見る景色はいつもと違ってきらきらとして見えるかもしれない。

就職活動中のある日、急にレモンが食べたくなった。あの酸味とさわやかな香りとで口の中をいっぱいにできたらどれだけ爽快な気分だろう。レモンの香るケーキが食べたい。そう思った瞬間に、私はスーパーへ向かう準備を整えていた。小さなトートバッグに財布と家の鍵だけを放り込んで、重い黒色のハイヒールではなく、明るい青のスニーカーに足を入れて外に出ると、荷物も足元も軽すぎて一瞬浮いているのかと思うほどだった。

浮きたつ心を抑えつつ、スーパーに到着して一番に向かうのは果物売り場。色とりどりの旬のフルーツや鮮やかな特売の札の間をぬって、黄色が目を引くコーナーを目指す。お目当てはもちろんレモンだ。作ろうと思っていたケーキはそれを皮ごと使うレシピだったので、できるだけきれいなものを選んで手に取る。次に向かうのは乳製品の売り場。家の冷蔵庫にはバター

がなかったので、それを買う。相変わらずの値上げに驚いたが、まあいいだろうとかごの中に放り込む。

他に必要なものは全て家にそろっていたはずなのでレジへと向かう。ベテランらしい店員の見事な手際に見とれつつ、会計を済ませて買ったものをかばんに詰める。大きなものは買っていないので手持ちのカバンで十分な量だ。ビニール袋のガサガサした感触があまり好きではないので少しうれしい。

さて、家に到着して手を洗ったらいよいよ調理に取り掛かる。材料を調理台の上に並べて、計量していく。お菓子を作る時にはここだけは慎重に、下準備を適当に済ますと後から痛い目にあってしまう。そして主役のレモンを手にとって、きれいに洗ってあるので、躊躇なくおろし金で皮を削っていく。ざりざりという音が響いて、あたりにレモンの香りが充満し始める。今家族が帰ってきたら玄関の段階で私の使っている食材がばれてしまうだろう、などと考えながらもざりざりとレモンの表面を削る手は止めない。作業を続けていると、書道の授業で墨を擦っていた時のことを思い出した。筆を使って字を書くのは最後まで苦手だったが、あの墨汁をつくる作業はとてもよかった。どうやら私は頭を空にできる単純作業が好きらしい。

そうしているうちに、レモンは皮を削られて、何とも言えない白い塊になっていた。これを一瞬だけ目の前に出されて「これは何ですか？」と聞いても「レモン」と答えることのできる人はどのくらいいるのだろう。普段考えているレ

モンの姿とはあまりにかけ離れていてずっと見つめていると不思議な気分になってくる。その白い塊を、深さのある器に入れて、スプーンの背で押して果汁を搾り取る。すると皮を削っていた時とは違うレモンの香りが立ち上った。皮の時は少し苦みを感じるようなものだったのに対して、こちらはいかにも「レモン」といったさわやかな透き通った香りだった。

レモンの下準備が終わると、次はバターに移る。大きなボウルに室温に戻したバターを入れて、クリーム状になるまでひたすらにかき混ぜていく。ぐるぐると力を込めて、泡立て器を動かす。この作業をするとき、いつも最初は全くゴールが見えないのではないかと思ってしまう。何かに悩んでいるときの心情と重なって、絶望的な気分になる。いつまで続けたらいいのだろう。そもそもこのまま続ける意味はあるのだろうか。楽な逃げ道がどこかにあるのではないか。そうした考えを頭から振り払って、楽な逃げ道という名の電子レンジはオープンモードに設定して余熱を始める。これでもう逃げ道はないと自分に言い聞かせて作業を再開する。すると突然手ごたえが変わってこの工程が終わったことに気が付く。この時の達成感は何にも代えがたい。

さあ、ここまで来たらあとはもう簡単なものだ。砂糖をバターになじませるために、またぐるぐるとかき混ぜる。その次には卵を。最後に薄力粉とベーキングパウダーと一緒にふるいにかけて入れる。この粉類をふるいにかける作業が、ケーキ作りの中でも一番楽しい作業だと私は思っている。家にはふるい器がないため、いつも網目の細かいざるを使っている。専用の道具ではないので、ざるの端をトントンとたたかないと粉がうまく下に落ちてくれないのだが、ざるを動かすたびに、その下には粉雪のように小麦粉が降っていく。山になっていく様子を見

ながら、徐々にざるの中の粉が少なくなっていくのを観察する。最後には球状に固まった小麦粉が金網を通り抜けることができずにくろくろと転がっている。この白い小さな球をつぶすのがとても好きなのだ。指でそろりと押しつぶすと、ぐにやりと形を歪めるのではなく、パシッと小さな音を立てて消えるのだ。実際には小さくなって、網の目を通り抜けて下へと落ちて行っただけなのだが、わかってはいても「消えた」と感じてしまう。毎日の嫌なことも、言葉にするには些細な悩みも、全部こうやって消えてしまえばいいのと思わずにはられない。

ふるいにかけた粉類を先ほどから材料を順に混ぜていたボウルに入れると、一瞬ぼふりと白い煙が立ち上る。それを気にせずに、泡立て器をゴムベラに持ち替えてガシガシ混ぜ込んでいく。真白の小麦粉と一緒に、無機質なメールでの通知や、なかなか埋まらない白紙のエントリーシートの記憶も混ぜ込む。混ぜて混ぜて、途中でレモンの皮と果汁を入れて、混ぜる。かすかに甘い香りを放つ薄い色の団子状のものができたら、ケーキ型に詰めて、いつの間にか余熱を終わらせてくれていた優秀なオープンの中に突っ込む。あとはしばらく放置だ。

使った道具を片付けながら、徐々にバターが溶けて砂糖と混ぜて焦げる甘いにおいが強くなってくる。片付けがすべて終わってオープンを見ると焼き上がりまで20分ほどであると知らせてくれる。ソファーに転がって、数時間前に届いていたメールを再び開いて確認する。

——衣笠様の今後のご活躍をお祈りいたします。

先ほど見た時ともちろん文章は変わっていない。この会社の面接ではうまく話せたと思ったのに、どうもご縁がなかったらしい。明らかに自動入力と思われる不自然なスペースのある自分の名前とその後に続くお祈りを見つめながらも、仕方ないと思えるくらいには精神状態は回

復していた。失敗することもある、私では合わなかったのだろう、そう思えたのは、きっと甘い香りのおかげだ。部屋中に広がるその香りで完成間近のケーキが存在を主張していた。

きっとこんな光景はありふれていて、誰の目にもとまらないようなつまらない日常の一部なのだろう。私と同じ時間に一斉送信の同じ文面のメールを受け取った人も何人もいるのだろう。同じ時間に、次回の日程の案内を受け取った人たちも。一人ひとりにとって、それは一日の中の大きな波となって、その人を呑みこんでいくのだろうか。私にとって、何かをつくるのが、そこから抜け出して平穏な場所に帰るための浮輪か何かのようにになっている。生地を混ぜている瞬間は頭の中を空にして、完成品を見ては達成感とおいしいものにありつけるという幸福感を味わっている。焼きあがったレモンケーキからは湯気が立ち上り、香ばしいバターのおいとさわやかなレモンの香りがした。

趣味は何ですかと聞かれたら、私はいつも「料理」と答える。けれども、本当のところは私にとって料理は趣味ではなくて現実逃避の手段の一つなのだ。特にケーキを焼く時は。

生きてるとあまりにも嫌なことが多すぎて、気が付くとそれをいつの間にか自分の内に溜め込んでしまっているように思う。それを上手に外に吐き出すための方法としてスポーツをしたり、カラオケに行ったりする人もいる。私は発散方法の一つとして料理をする。

いつか嫌なことで生活が埋め尽くされて、そのたびにケーキを焼くことが日常の一部になって、それに対して嫌気がさすことの無いように祈っている。

佳作

「思いあがった諧謔心」による学び

田中 昇一（日本史学専修3回生）

「諧謔心」とは「ユーモアのある心」を意味する語である。梶井基次郎の『檸檬』という小説内に登場するのが、この「思いあがった諧謔心」という言葉であり、私にとって自らの学問と向き合うとき、この「思いあがった諧謔心」が不可欠であったように思える。

私は日本史学専修に所属している。専修への配属自体は2回生の4月であるため1回生の間の1年間を含まないものの、それでも1年以上を専門的な学習・研究に費やしてきたことになる。その間、何にも臆することなく歴史学を学ぶことは私にはできなかった。やはりそこに付き纏うのは「歴史なんてやって、将来何の役に立つの？」という素朴で重大な問いかけであり、今も完全には超えることができていない「壁」である。この問いに対して私が考えてきたことを述べてみたい。

本稿執筆中は、不安定な天候が続く梅雨の直中でありながら、日が差すときを狙って早鳴きの蝉の声が響く時期である。そして私は、ちょうど1年前、初めての演習発表を前に暗くなるまで学内で報告準備に明け暮れていたのを思い出す。

時刻は零時前。日中の大学とは違い学生の足音や声は皆無。しかし、そこには聞きなれた「ある音」があった。まさかとは思いつつも窓を開け、音のする方に目をやる。果してそれは蝉の声であった。周囲の暗闇に溶けこむことなく、街灯に照らされた樹木で蝉が元気よく鳴いているのだ。調べてみたところ、蝉はふつう夜に鳴くことはないが、街灯によって明るい夜、あるいは25度以上の気温の高い夜のいずれかの条件を満たしているとき、昼と錯覚して鳴いてしまうらしい。後者の条件については容易には明

言しがたいものの、前者については間違いなく人類の生み出した文明が蝉の生活を狂わせていると言えよう。そう考えると何か申し訳ないという感情が生まれてしまう。同時に私はこんなことを考えてみる。いつもやかましく鳴く蝉に対し、「あぁうるさい」「迷惑だ」としか感じてこなかった自分は、蝉の声を「被害者」的側面からでしか捉えようとしていなかったのではないかと。蝉が自らを「被害者」、いや「被害『蝉』」であると自覚しているかどうかは定かではない。ただ、私たち人間は夜に鳴く蝉の存在から、自らの「加害者」的側面を肯定するしかないように思えてしまう。

こういった考えに至ったのには理由がある。時はさらに遡り、1回生の後期、「人文学基礎・日本史学」の授業でテキストとなったのは永原慶二著『20世紀日本の歴史学』という本であった。高校までに学んできた単なる「歴史」とは異なる、「歴史学」というものがどういうものであるか、恥ずかしながら私はここにおいて初めて深く考えることになった。本書の中で述べられた戦後歴史学の過程の一部を挙げると以下のようなになる。^(注1)

終戦直後、戦後改革は戦前・戦中の歴史を踏まえて現実をどのように変革すべきかという点が重視されたが、そこに潜在していたのは自国を「敗者」と想定し、敗因の克服を通じて自国の再生を図るという発想であった。しかし1970年代になり、戦争を直接経験していない世代がアジア諸国との接触を通じて、先の戦争における日本の「加害者」としての歴史認識が欠如していたことを痛感したのだ。これは戦後日本の歴史学の大きな転換点の一つであろう。

この記述を目にしていたために、私は夜に鳴

く蟬との接触によって「被害者」・「加害者」といった視点を想起したのだ。そして、ひとしきり考えをめぐらせたのち、「歴史学を学ぶ意味」についての私なりの見解を見出だすきっかけを得たように感じた。ただ、このとき得た知見が私にとっての大きな転換点の一つになるに違いない、とは思ふものの、いまだはっきりとした回答が得られたというわけではなかった。すっきりしない気持ちでいた私にさらなるヒントを与えてくれたのは、丸山真男著『日本の思想』であった。本書において彼は、日本文化が雑居性を有するものであるとし、その理由を以下のように考えている。本文を原文そのまま示す。^(注2)

「あらゆる時代の観念や思想に否応なく相互連関性を与え、すべての思想的立場がそれとの関係で—否定を通じてでも—自己を歴史的に位置づけるような中核あるいは座標軸に当る思想的伝統はわが国には形成されなかった(傍点は著者による)」

この文言を見た私は、自らの生き方を改めて顧みることにした。そして感じたのは、小学校、中学校、高校、大学という進学に際してはもちろん、クラス内および部活動内の別、特定の友人にのみ見せる態度など、多くの「世界」で生活することを経験し、「人前ではこういう自分でいよう」とか「他人からこう見られたい」という考え方によって現在の自分は形成されているのだ、ということである。もうどこにも「本当の自分」なるものが見えない段階にまで来ているのだろう。自らが自らを取り繕っているであろうこと自体は自覚をしているが、それらを悉皆挙げ今の自分から一つずつ丁寧に剥ぎ取っていても、そこに残ったものが「本当の自分」であるとは言えないだろう。周囲に阿附迎合することでもつくりだされた、それまでなかった「新しい自分」が既存の自分にまったく影響を与えることなく共存するとは思えないからだ。それは、日本が外来の文化を受容する際に自文化を

変容させていったことと同じことではないのか、と考える。生きていく中でその時々に見れる「新しい自分」は、既存の自分を変容させることで一つの自分となっていくのであり、そうやって私は私たりうるのではないかと思う。親は子どもに社会に出ても恥ずかしくないような人間に「成長」しろと言うが、この「成長」とは、こうして「新しい自分」を創出し自分自身に貼り付けていくことなのかもしれない。

さて、ここで丸山のことばに戻ってみる。既述のように変容していく私自身を客観的に位置づけようとするとき、中核や座標軸としての「本当の自分」というものが見えなくなってしまった今、丸山の表現と私自身との間に符合する部分が大いではないか。そしてそれを前提とした丸山の研究はじめ歴史学というものの中に、自分をどうとらえ、自分はどう生きるべきなのかという指針を見つけ出すことができるかもしれないと思っている。ここにおいて、私が歴史学を学ぶ理由はここにあるというひとまづの答えを得ることができた。

こうしてそれなりの回答を用意はできたものの、あまりに観念的であり説明も難しく、多くの人を納得させられるようなものではないことも感じている。この点を克服するには、やはり歴史学というものが現実と与える実益というものを強調する必要があるのだろう。「社会」がそれを望んでいるからだ。これもまたすぐに答えが出る問いではないが、今この時においてはのんびりしてもいられない。

昨年六月の文科相の決定は、全国に少なからぬ衝撃を与えた。マスメディアの多くが「人文系学部の廃止」という誇大な表現を選択したことも、その影響の大きさを反映しているのかもしれない。この決定がどれだけの大学を動揺させたかは、その決定に対して声を挙げた専門家・研究者の数からして言うに及ばない。歴史学はもちろん人文科学系の学問は岐路に立たされて

いる。しかし、自らの学問のアピールに躍起になるあまり、その学問が果たすべき役割を超えたところにまで議論が及んでしまっただけで元も子もない。それぞれの学問がどういう立場でどのように社会に影響を与えているものなのかを明らかにすることで、人文社会科学の軽視という風潮を乗り越えていく必要があるのだろう。

本レポートの提出締め切りが1週間後に迫ったとき新聞やネットが一斉にとりあげたのが、天皇が生前退位の意向を示したというニュースであった。方々が歴史的に前例があるかどうかをはじめとして生前退位の是非を考えようとしているが、これは歴史学の強さが発揮されるべきところではないだろうかと感じている。報道されてからまだ日が浅く、国家として今後どういった結論が出るかは分からないが、人文科学系の学問が中心となって議論がなされることを私は期待している。

こうした社会の動きに合わせて、私も友人とともにあれこれ意見を交わし合ってきた。内容自体は決して専門的でも独創的でもないものばかりである。それでも、問題解決に向かう何か些細なきっかけぐらいいは見つけられるのではないかと思ってしまうのだ。「なぜ歴史学を学ぶのか」という問いに対する自分なりの回答を得られてから、そんな根拠のない自信のようなものが湧いてくる。私にはこの感情が冒頭で提示した「思いあがった諧謔心」であるように思えるのだ。考えてみれば、蟬を見て加害者の感情を覚えたり、日本文化の雑居性に自らの生き方を投影したり、その時々において「思いあがった諧謔心」が私の中に現れていたのではないだろうか。専修の授業が増えていく中で生まれた自信や責任感を現出させるとき、私には「思いあがった諧謔心」が必要であったのだ。言うまでもなく、ここで挙げてきた各問いについては完璧な回答にたどり着いていなし、繰り返されるが、皆に納得してもらえようような考えであ

るとも感じていない。だからこそ今後も「考える」ことをやめるつもりはないし、その都度、私は、自らの「思いあがった諧謔心」にお世話になっていくことだろう。

(注1) 永原慶二『20世紀日本の歴史学』(吉川弘文館、2003年)による。

(注2) 丸山真男『日本の思想』(岩波新書、1961年)による。

佳作

大人になるということ

大人になるというのはどのような状態をいうのだろう。法律で飲酒、喫煙が許されるようになる20歳で大人になるのだろうか。体が大きくなり大人の兆候を示し始めたときからだろうか。今年の参院選から18歳以上に選挙権が与えられ、私自身有権者となり、一人暮らしをはじめ、親から離れ、社会に出始めた状態である今、「大人になるということ」について考えてみる。

大人になることの大前提として、経済的に自立しており、経済的支援を受けることなく生きていけることとする。どれほど、これから述べる大人の条件に当てはまったとしても、お金を稼ぐ手段を持っていながら十分に自身を養うことができないのは、どこかに大きな欠点を抱えているからだと言わざるを得ないからだ。そのため、この前提をもとにして述べていく。

まず一つ目の条件は、物事を広い視野で捉えられるということだと考える。現在の社会は言うまでもなくグローバル化しており、私たちもその影響を受けていることを否定することはできない。たとえば、ある国の経済が不安定な状態になれば、その他の国でも株値に影響が出たりして国の政治をも変化させかねない。また、私たちの消費行動でさえ世界の人々に影響を与える。外国で作られた衣服や食料を購入すると、その製造者の生活になんらかの貢献をすることになる。このようにして世界はつながり動いている。では、こんな社会で物事をどう捉えるべきだろうか。私たちは少なくとも二元論で片付けられるような単純な世界には生きておらず、複雑に絡み合った世界に生きていることを認識した上で考えなければならない。たとえば、ただ単純に森林の伐採は悪だとするのは

中澤 篤史（学部1回生）

なく、森林伐採により作られた工場で生み出された雇用の増加により生活の質が向上する人々がいることも考慮する必要がある。子供の飢餓での死亡率の高いある国に、一人でも多くの赤ちゃんを救おうという善意で送られた粉ミルクが、現地の水質の状態を把握していなかったために、飢餓を促進させたということも事実としてある。私たちは目の前の出来事を通して、そのさらに奥まで視野を広げていかなければ、知らず知らずのうちに知らない人を傷つける可能性を含んでいる。物事を上下左右、多面的に見て、さらに奥行きまでもみる。これが大人の思考であり、目先の利益を重視する子供と大きく異なる場所であると思う。

二つ目の条件は、言葉のキャッチボール、つまり、コミュニケーションを適切に行うことができる人だと考える。最近、テレビなどで政治家の記者会見の様子や報道陣の質問に受け答えする様子がしばしば流れているが、まるで記者の問いかけに外れた答えを返す人が多いように感じる。政治に詳しいか否かは別として、聞いている側も会話が成り立っていないという違和感を感じたことがある人は少なからずいると思う。テレビのコメンテーターや番組の討論会のようなところでも、意見が分かれた途端、会話が成り立たず言葉が一方通行している場面がある。野球で言うキャッチボールを例に出すと、何年も野球をして何百回とキャッチボールをしていれば、ボールから相手の状態、気持ちというものはわかってくる。言葉のキャッチボールにおいても、何年も繰り返すとそのようなものは感じ取れる。それにも関わらず相手の情報を感じ取ろうとせず、ただただ自分が好きなように捕って投げてを繰り返すキャッチボールに何

の意味もなく、相手がいる必要さえない。壁に向かって投げていればいい。相手がいて成り立つものである以上、相手を考慮しなければならないのはいうまでもない。子供同士のキャッチボールであっても、好きなように投げると続かないため、子供は相手のとれるところに投げようとする。言葉のキャッチボールでも野球のそれと構造的に変わるところはないと思う。討論という会話の場に何人かいたとしてもそれを意味あるものにするには、相手の情報と自分の情報を相互に送受信しなければならない。自分の情報だけ送っても相手からの送信を受信しなければ、ボールは帰ってこず会話は成立しない。野球の場合ボールという物質があるため行き来がわかりやすいが、言葉は見えないためにキャッチボールが難しくなっているのだと思う。そのため基礎練習として挨拶というものが存在する。それは言葉のキャッチボールの最も簡単な形であり、子供のころから繰り返してきたものだ。その応用としてのコミュニケーションを適切に行えること、子供の頃からしっかり挨拶という基礎を磨き続けてきたこと、それが大人の条件であると思う。

三つめの条件は、矛盾を受け入れることのできる人だと考える。私はまだ18年しかこの世界におらず、社会に出た、と言えるほどの経験も積んでいないが、矛盾を感じたことはある。誰でも感じたことがあるであろう矛盾の一つは、なぜ勉強をするのかということだ。数学ができなくても生きていけるし、国語の問題が解けなくても日本語でコミュニケーションをとることもできる。まして英語なんて話せる必要もない。現に、高校も出ていない人たちがテレビ、社会に出て、様々な形で活躍している。それでは、なぜ私たちは勉強をし続けているのだろうかという問いに対する明確な答えは、まだ私自身の中に存在していないが、勉強をすることで矛盾に対処する機会に多く巡り会えることは確

かだと思う。ここで言う矛盾は、自分自身の頭の中に存在しないもの、つまり、異なるものが出現するということを表す。国語を勉強する中でいろいろな人の多様な評論文を読み、現在の自分の考えと異なるものに出会ったときどのようにその問題と向き合うのか。理科の実験で自身の予想と異なる結果が生じたときどのように受け止めるのか。自分の頭で整理してじっくりと考えるのか。それとも、自分の知識を補うための方法を講じるのか。様々なアプローチで矛盾に立ち向かう。勉強はそんな練習をしているように思われる。それもこれも、現在の世界には多くの矛盾、異なるものが存在しているからだ。たとえば、まだ社会に出ていないためイメージでしかないが、限られた時間と予算の中では厳しいと思われる事案を上司から課されたとき、なんとでもやり遂げる必要があるし、不条理な上下関係に悩ませられることもある。もっと広く世界に目を向けると、異国の思想、文化を持った人がたくさんおり、自分の中では理解できないような行動を起こす人もいる。そんな中で私たちは生きている。そしてこれからも生きていく。異国の文化に触れたときにおこるカルチャーショックのように今までと大きく異なる時代に入って「ピリオドショック」に陥らないような手段を身につけた人、そんな人が大人であると思う。

最後の条件は、贈与の心を持てる人だと考える。贈与の関係の上に成り立っているもの一つとして親子関係がある。子が親からしてもらうこと、たとえば、食事の準備、教育関連のこと、身の回りの清掃、など数えだしたらきりがなし。市場の原理からいえば、そういったサービスにはお金がかかる上に、利益を追求するため損得勘定がうまれる。しかし、親子関係では、親が食費、学費や塾代を払ってくれる。弱い立場である子供を守らなければ社会が成り立たなくなるからだ。これはボランティア活動にもつ

ながっている。たとえば、震災が発生しその地が壊滅状態である時、そのままではその社会が成り立たない、となれば、多くの人が瓦礫の回収や交通機関の整理などのボランティアに参加する。そこには損得の勘定はなく困っている人に自分の力を与えようとする贈与の気持ちが働いている。資本主義の考え方が頭に浸透してしまっている私たちは、行き詰まり始めた資本主義のほかに、贈与の関係を多く築かねばならない。贈与の関係を多く結べば、利益のために互いの足を引っ張り合うことのない、助け合い支え合う、より生きやすい環境が生まれると思う。子供にはお金がかかるから子供を産まないだとか自分がよければ周りの人が苦しんでいてもかまわないといった心持ちでは自分という殻に閉じこもる子供のままだ。自分の力を他人に分け与えようという気持ちがこれからの社会の鍵となり、その社会で生きる大人に必要なものではないだろうか。

ここまで、私の18年間の経験に基づいて大人になるということについて考えてきた。自分自身が大人になりきれていない中、今までに出会ってきた様々な人をモデルにして考えたため、客観的なイメージによる部分が多く、複雑な大人の世界を十分に表現することはできていないと思う。それでも、将来教師を志している私にとって子供の目線から見て、いい大人の条件を考えることで、現段階において一人の人間として目指すべきところが見えてきた気がする。ここの文学部で4年間勉強する中で、多面的なものの方や深い思考力を養い、4年後には、今の自分には備わっていない大人の思考を少しでも身につけた状態で社会に出られるように、日々考え、日々精進していこうと思う。

佳作

「茶碗の中の池」

茶道をやっています、と言うと大抵へえ、とかそうなんだ、と返される。それ以上会話が発展することはあまりない。これは高校・大学と茶道を続けている自分にとってはかなり寂しいことである。だがそんなわたし自身でさえ、以前までは、自分が大学でも茶道をやり続けることになるだろうとは夢にも思っていなかった。新しく始めた一人暮らし、新しい友達、新しいキャンパスライフ。何もかもから新品の香りがする大学生活で、なぜわざわざ経験済みのことを再びやらねばならないのだろうか？もっと別のことを始めた方が「大学生のわたし」には合っているはずだ——そんな風に思っていたのに、それでもわたしは結局茶道部に入ることを選んだのだ。

大学に入ってみて驚いたのが、思ったより高校と変わらないということであった。もちろん履修登録などの制度の上ではまるっきり違うし、授業の内容もより専門的になっている。が、違いといえばそのくらいで、わたしの時間割では朝から夕方まで授業があり、体感的にはあまり変わらない。当然のごとく常に授業があり、宿題がある。また、もう制服は着なくてもよくなったが、たとえ私服になったとしても、それにくるまれている中身が劇的に成長することなどもなければ、以前と比べて別人のように垢抜けるといってもない。わたしはただ高校生の延長線上にある大学生として暮らしている。勝手な言いぐさだが、これまで大学に夢を見てきた自分にとって、それらは驚くと同時にがっかりすることだった。高校と大学の間には決定的な断絶などなく、せいぜいパラグラフが変わっただけで、わたしという文章そのものがすっかり変身することなどあり得ない。だが厄

山根 彩花（学部1回生）

介なことには高校と大学が同じというわけでもないから、新入生のうちは不安を抱きながらひたすらヨタヨタと歩いて行くしかないのだ。

そういった状況の中で、わたしは入る部活・サークルをいつまでも決めかねていた。見学に行ったところはどれもキラキラしていて楽しそう、その中からどれか選び取るのは難しいように思われたのだ。周りが楽しそうに自分のサークルの話をしているのに、自分はいつまで経っても無所属のまま。焦りに焦った挙句、とっさに家族に連絡して事情を説明すると、「茶道部は行ったの」と言われた。経験者なんだから一回行ってみたら、と。「そういえばそうだったな」と思い、見学に行った。すると驚いたことに、そこで見たお点前が非常に新鮮に感じられたのだ。これまで散々見慣れてきたはずのものにもかかわらず、である。

茶道というのはその作法が細かく決められていて、それらを習得するのは難しいが、一度覚えてしまえば流れるように物事が進んでいく。しかしながら、それは決して機械的というわけではなく、作法一つ一つにはちゃんと意味が込められている。そこには確かにおもてなしの心が存在しているのだ。だから亭主としてお茶をたてるのはいつも一人の作業だが、孤立感のようなものはまったく感じない。この部分は高校も大学も変わらないものだ。だがわたしが高校までにやっていたのは裏千家の茶道で、大学の茶道部は表千家である。大方は似ているものの、その作法はところどころ微妙に異なっていて、見ている側でもやっている側でも驚いたり戸惑ってしまったことがある。見学の時もそうだった。先輩のお点前を間近で見ている、席に入るときの足や袱紗のさばき方といった所

作が、自分が知っているものと違っていることに気づいた。そのように、同じだと思っていたものが実はよく見ると別ものだったということが、大学に入ってその変わりばえのなさに辟易していたわたしにとっては、「もっと目を凝らして見てみるよ」というメッセージのようで嬉しかったのだ。そこに魅了され、わたしは迷わず入部を決めた。

いくら異なるとは言え作法は覚えなおせば済む話だが、お茶のたて具合まで違うとなると話がいくらか変わってくる。裏千家ではお茶を綺麗に泡立てることをよしとする一方で、表千家ではあまり泡立てすぎないのが望ましいとされているのだ。先輩いわく、「お茶碗の真ん中に池ができるくらいがいい」とのこと。しかし、この加減が非常に難しい。これまでのように力いっぱいたてるのでもなく、そうかと言って力を抜きすぎると今度は泡が立たない。お茶をたてる度ごとに「池、池、池・・・」と何度も頭の中で念じているものの、それが茶碗に具現化したのはせいぜい一、二回だろう。そういうわけで、お茶をたてるのは毎回緊張の一瞬である。

今ははっきりと言えるのは、茶道を始めてから大学が面白くなっていったということだ。それは大学で部活をやるからというよりも、茶道をやるにつれ大学そのものを楽しんでやろうという気概が生まれたからだと思う。入学当初は変わりばえしないと一蹴していたものも、よく見れば全然違うかもしれない、あるいはもっとももっと咀嚼していけばもしかしたら思いもよらない味がしてくるかもしれない、などと考えるようになった。そして実際そうだった。「大学生になったなあ」と実感する出来事があるたびに、宝物を見つけたような嬉しい気分になっている。

大学生活と茶道。高校生のときと違うようで似ていて、似ているようで違うこの二者は、今

や心の中で地層のように折り重なって、わたしの一部となっている。しかしながら大学で茶道を始める前のわたしにとって、「自分が大学生になった」ということは今よりもずっとその輪郭がぼやけていて、ともすると一瞬で霧散してしまいそうな現実であった。以前実家に帰省した際に、その感覚はより顕著になった。数か月前とまったく変わらず参考書や赤本などが置かれている自分の部屋や、相変わらず雑然としていて、そういうところがわりと好きだった故郷の街なんかを見たときに、戻ってきたという安心感やついに大学生になったぞという自負と共に、まるで宇宙に突然放り出されたかのような漠然とした不安に襲われた。そのとき「セミは自分の抜け殻を見たときにこういう風な気持ちになるのかな」などと思った。おそらく、わたしが完膚なきまでに大学生になっていたとしたらこのようには感じなかっただろう。大学生でありながら、自分の新生活に高校時代の影を見出していたころの自分だったから、その風景を見たときに、大学生というアイデンティティを保ちきれず「自分は一体誰なんだろう」という気持ちになったのだろうと思う。

この数か月で自分の身に起こった変化を思うにつけ、これまでの自分、これからの自分についてしきりに考えてしまう。これまでも小学校、中学校、高校と進んできたし、それにもともとわたしの家は転勤族であったため、環境の変化はよく体験してきたことだった。そしてその度に、今回の帰省の時のような、地に足がついていないような浮遊感や不安感を感じ取ってきたものだ。過渡期特有の不安定さなのだろう。だがとりわけ今回はそれらの感情に強く揺さぶられたように思う。考えられるその理由としては、大学生になると同時に家族という人間の根のようなものから独立して、自分で責任をもって行動せねばならなくなったということだ。誰かではなく、わたしが作り出したルールでもってわ

わたし自身を律しなければならぬ。茶道をきっかけに高校と大学の様々な違いを味わえるようになったことで、それらの根本的な隔たりをやっと目を据えることができるようになった。やはり大学生になるというのは決定的なことなのだ。その部分を見捨て、表面的なことばかりに拘泥していた自分はまだ「大学生」ではなかったのである。そしてもちろんもう「高校生」でもないから、抜けた歯がいつまで経っても生えてこないような、寄る辺のない気持ちになる他なかったのだ。そこから時が経つにつれ、自動的に学年・学校が変わっていくこれまでとは異なり、「大学生」とは自ら獲得していくものだと気づかされた。だがそのようにして大学生、そして社会人と自分の将来を仰ぎ見ると、そこには高校と大学以上の違いがあるように思える。わたしが負わねばならない責任はこれまでの比でなくらい重くなっていくだろう。今この段階で嘆いてはられないような大きなプレッシャーに将来さいなまれることになるかもしれない。それでも、結局は同じだ、と楽観している自分がある。これまでとは違う自分になるということは、「茶碗の中の池」へとがむしゃらに進んでいくことなのだ。

まったく知らなかったところに身を置かねばならないとき、誰しもが戸惑い悩むものだろう。これまでとの類似や相違に大きく心を動かされたり、時にはこれまでの自分が損なわれたような気分になったりすることもあるだろう。だがそれらは必ずしもつらいことではない。これから自分がどんなものを獲得したいのか、どんな自分を人に見せたいのか——どれくらい完璧な「茶碗の中の池」を相手に差し出したいのか。そういったことを考えるきっかけになるはずだ。もちろん「茶碗の中の池」は簡単には達成できないものだし、やっと近づいたと思えば今度は「茶碗の中の川」なるものを目指さねばならないかもしれない。しかしそのようなこと

を何度も繰り返すことが、わたしをどんどん熟成させ、「真の大人」にしていくのだと思う。

わたしは今純粋に大学生を楽しんでいる。本当の意味での「大学生」にはまだまだ遠いかもしれないが、それでも一步一步近づいていける気がするのだ。少なくとも、近づくことを嫌がったりためらったりはしていない。わたしは今日も茶碗の中の緑に映る自分を見つめ、茶せんを握りしめながら、さて今日は上手くいくかな、などと思い巡らせている。

佳作

「純粋な関係」をめぐる通念と私見

三宅 萌 (学部1回生)

関係は言葉から始まったわけでも、言葉に終るわけでもないのだろう。もし言葉がなければと夢想することは無意味だと、私を通り過ぎる何人に言われたのだったか。「言葉では言い表せないもの」と言葉で言い表しているのではないかと、得意げに、煙に巻かれたのはいつだったか。悔しさは自らの無知へ、言語能力の弱さへと向かった。

高校の国語科の課題に、ある関東の大学の入試問題が扱われたことがあった。高校二年の夏だったか、解答の作法をまるで知らず大問ひとつに何時間もかかった。それが何の書物からの引用だったか今では記憶もおぼろで、当時の粗い読みによる曲解である可能性も高い。以下に述べる解釈は、元になった文章の含意した内容から外れているかもしれないが、しかしそれは、十七歳の心を眩しく覆った。一時期に規範とさえなったその文意は、概ね以下のように要約される。「関係は自発的な意志の連続から結果として持続をもたらしべきものであり、持続を志向した途端それは純粋ではなくなる。」本文を震えながら読み、人間関係をめぐる私自身の不満が発露していると思った。うぬぼれも甚だしいが、五つ程度あった小問はこの要約と等価だとさえ感じた。

しかし、関係の純粋性は「普通は」渴望されない。最も顕著な例は、小学校でうるさいほど訴えられた「みんなと仲良く」であり「握手で仲直り」であろう。なぜ仲良くすべきなのか。わざわざ握手という儀式を仕立て、持続の価値は疑いを挟まないよう巧妙にカモフラージュされているのではないか。子供のころの一年はあまりに長かったからか、教師は子供に徒党を組ませたいのではなく「持続」を志向させたいよ

うに感じた。けんかしても仲直りをする、けんかをしたあとに仲のいい未来を想像させ、価値あるもののように錯覚させる仕掛けである。

予備校時代に親しくしていた友人と恋愛の話をしていたときに、私と決定的に異なる点があった。例えば恋人と言い争いになったとして、仮に解決策が腑に落ちなくとも付き合い続ける、付き合い続けられる、なぜなら「恋人」だから、というのである。「恋人」であれば相手に気にいらないところがあっても、それをおして付き合い「続ける」べきだと言うのである。彼女は同様に「家族」をあげ、「友人」をあげた。私は家族という関係の形態をやたらに賞揚する人々の気がしれない、初めからそうであったために疑いを抱くことを怠けているのではないかとさえ思う。彼女の考えは恐らくは社会通念と呼べるようなものであろうし、何かしらの根拠はあるが言語化しがたいのだと仮定してあれこれ考えていたが、その根拠がわかったのは大学入学後であった。

ところで通念とは、いや「普通」とは一体何であるのか。「普通などない」とはしばしば耳にすることだが、同じくらい頻繁に「普通は、……」とも日常の言語活動で用いられよう。どこに母体を仮想するかで大きくことなるような語を何の前提もなしに使うことに抵抗はないのかと憤り人との会話が滞るようなこともあったのだが、記念すべき第二クォーター「物理学B」、そして「日本語学」の授業が、長年の私の偏狭を和らげてくれた。

「物理学B」では、記憶に新しい、アインシュタインの相対性理論の解説時のことであった。静止系に固定された時計と運動する慣性系に固定された時計は時差が生じる(運動する時計が

遅れる)という内容で、そのような非常識なことが、光の速さを問題にする場合に起こるといふ。しかし、ニュートンの運動方程式はわれわれの日常の生活、光の速度に対し明らかに遅いような場面においては何の差し障りもなく使用することができる、と授業は続く。「僕たちの普通の世界では、普通というのは $v/c \rightarrow 0$ の極限ではという意味ですが、式はニュートンの運動方程式に近づくのです。」ここで教授はこともなげに、普通という語を、しっかりとした意味を持って使用されたのである。物理屋さんの日常的な言語生活においては「普通は $v/c \rightarrow 0$ の極限」だといふ。

つまり、「普通なんてものはない」のではなく、「普通という語は時々に応じて変化する内容がある」のであったのだ。こんな単純なことに成人してやっと気づいたのだが、しかし、ようやく使える、世間に氾濫する「普通」という語の意味が不明であったために使用できず推測も怪しかった長い夜が、ようやく明けたのである。

その後、改めて裏付けを得たように感じたのが「日本語学」における「プロトタイプ論」の紹介であった。語の定義づけは困難であるが、それをある種可能にする理論として紹介された。授業では、「野菜」という語に対し、もやし、しいたけ、らっきょう、かぼちゃ、いちごなどが挙げられ、これらを野菜と思うかと生徒は問われた。どれもこれも、例えばほうれん草、ブロッコリーなどと比して野菜かどうか判別つきにくい。

語には中核となるラングと外縁的なラングがあり、端の方はまた別の語とも交わっていて境界は曖昧になっている。しかるに語を、典型的な内容から把握しようではないか、といった考え方だと理解したが、このプロトタイプ論は、いわゆる「普通」という語の使用の実態そのままではないだろうか。そして興味深いことに、語の意味は、辞書的意味や法的意味、商業的な

意味、また日常の言語活動における意味では差異が生じることがあるという。つまり、「普通」は各人の文化的背景に依存すると実例をあげて、国立大学の授業で述べられたのである。このように述べると権威主義的で我ながら悲しいのだが、しかし、「普通という語に絶対の意味を付与できない」と、「しかし普通という語が使用されている」ことのフラストレーションが、言語化された啓示と共に解消されたのである。普通という、いわば粹組みだけで中身の無い語の、粹組みこそが中身と言えるような語の不可解さは、林檎、犬、靴下、などの普通名詞とは異なるが、それらと例えば愛情、信頼、希望といった概念を表す語との中間的な位置にあるようではないか。

語の定義がプロトタイプ論的に語られるならば、概念も同様であるはずである。何人かの人々に思いを向けたが、それは友情か愛情かと語意を確かめ合う気概のない者たちに問われ、言葉が浮き上がっていることの気持ち悪さに口をつぐんだ。友人か恋人かと問われ、関係が名前によって規定されることに嫌気がさした。純粋な関係、どこではなかった。だが、各人の語の理解の程度に関わらず、「普通の」言語活動においてこのような語の使用頻度は高い。同級生との会話がうまくできないのは、私の知らない「社会通念」とでも言うべき何らかの前提が共有されていて、それが言葉の意味を規定しているのではないかと疑った。

多くの社会通念を、「普通に」流通している概念を、私はほとんど納得できない。青臭い若者である私の関心事のひとつは人間関係であるが、「関係は持続を志向すべきだ」という暗黙の了解に著しい抵抗を感じていた。持続に一体何の価値があるのか。現在の不愉快を耐え忍んで何が得られるのか。私のこの感覚は、過去というものへの懐疑に端を発するのだと感じる。過去が記憶に過ぎず、記憶はあまねく失われる

さだめにあるなら、過去なんてないのではないか。次々に浮かび上がっては消えていく情緒の機微をそのままに記憶することはできない、確実に何かは失われる。そしてどれほど強く感じたものよりも一行の「言葉」の方が人間の記憶には適しているのではないか。読書体験時の情感は失われあらずじしか記憶にないという屈辱的な経験は、圧倒的な語彙の不足から来るとしても、言語が言語ならざるものに過剰に影響を持っているように思われてならなかった。ではもし過去が言葉でしかないならば、持続を志向することに何の価値があるのか。

それでも、私に取れる強力な手段は言葉しかなかった。心惹かれる人物と親しくなるときに、相手への感動、「瞬間的な」感情を最も完全な形で捕まえて、再び立ち現れることを可能にするように気を遣って言葉を重ねてきた。そして相手が親しければ親しいほど、好まないと感じる場面に出会っては態度を改めた。嘘をつきたくない、純粋な関係を取り結びたいと意地を張った。

しかし言葉の形をとって表れたものは、私的な生活においては、言語ならざるものせめて影を捕まえないという欲望に由来する。言語ならざる瞬間的なあれこれを、あまりに強力な言語への対抗措置として優先してきたのだが、これは言語に対する不当な扱いであったのかもしれない。言語の積み重ね、一瞬一瞬の積み重ねまでも、一瞬の激情で覆してしまってもよいのだろうか。一瞬ごとの積み重なりで真摯に向き合ったという自信があるならば、それらが誤りであったと考えるのとせめて同程度には、瞬間的に覚えた不快が誤解だと考えるべきではないのか。

「純粋な関係は持続を志向しない」という言葉の字面を追って期待を上乗せ、強固で立派な理想を作り上げてきた。それこそが言葉に欺かれていると知らずに。言葉と言葉ならざるもの

とを対立させるのではなく、必要なのは調和なのではないか。持続を志向しなければ関係が純粋になるわけではない。わずかばかりの持続さえ志向しなければ、関係は不純になってしまう、人間が判断を誤らないわけではないからである。通念に立ち戻るのではなく、通念と懐疑を調和させること。これこそが純粋性へ至る唯一の道なのではないだろうか。